演題番号13

身体性が変化した慢性期右片麻痺患者が社会と繋がるための問題点の考察
- 第二報 -

○加藤 祐一[1)] 上田 将吾[1)] 塚田 遼[2)] 山中 真司[2)] 吉田 俊輔[1)] 高木 泰宏[1)]

1) 結ノ歩訪問看護ステーション
2) 結ノ歩訪問看護ステーション東山

【はじめに】
結城（2008）は脳卒中患者の自己身体表象を時系列に分類し，最終期で〈諦めと期待の同居〉をあげている．昨年の本学会にて身体性が＜回復への諦め＞から＜行為可能性への希望＞へと変化したことを報告した．その後の経過の中で，目標が＜身体的目標から社会的目標への変化＞となり，社会と繋がろうと葛藤しながら自己身体と向き合っていた．本研究では身体性が変化した症例と社会との問題について考察したため報告する．

【対象と方法】
対象は50歳代男性．左被殻出血にて右片麻痺と失語症を呈し，Br-sはⅢ-Ⅲ-Ⅲであり，介入期間は介入後，約4年が経過した後の1年間であった．方法は対象に半構造化インタビューを実施し，音声データを元にトランスクリプト化し，各々にテーマを設定した．各テーマ間の結びつきを発見し，さらに上位テーマを設定する方法で分析を進めた．テーマ設定と分析は5名の質的研究経験者と共に行った．分析はHeideggerの概念である“現存在が世界の中で生きた時間や経験に接近するには解釈によるほかないとした，解釈が先行理解に基づかざるをえない”とする考え方を踏襲し分析を行った．

【結果】
意欲低下の評価Apathy Scale（Starkstein）邦訳版「やる気スコア」は8/42点から1点となり， 自己効力感尺度General Self Efficacy Scaleは6/16点から8点となり，主に能力の社会的位置付けが向上した．症例は＜心配ない身体＞にも関わらず＜障害者として扱われる自分＞に不満を持ち，目標が＜身体的目標から社会的目標への変化＞となっていた．＜自分が障害者という事からの脱却＞を図っていたが，同時に＜障害者として扱われる自分＞＜転倒する恐怖＞や＜リハビリしないと不安に思う身体＞を感じ，相反する思考の中で葛藤していた．

【考察】
身体性が＜行為可能性への希望＞へと変容したことで，＜身体的目標から社会的目標への変化＞となり目標を達成できる事が増え，各スコアの向上に繋がった．しかし障害者として扱われる社会の中で＜片麻痺としての身体＞に向き合わざるを得ない状態でもあった．それは＜行為可能性への希望を持ち＞社会で生活しようとする症例を《障害者としての社会環境》が抑制している現状が考察された．

【倫理的配慮，説明と同意】
本研究の主旨，プライバシーの保護について説明し同意を得た．